



写真23 クッキー状の土器



写真24 焼きが硬い土器

この二つの遺跡も「曽畑式土器」が出土しているが数は少ない。対馬北西部に朝鮮半島系の土器を使う人々が、そして、北部に「曽畑式土器」を使う縄文人が生活していたことになる。「シレンナー遺跡」の南西20^{キロ}に「越高遺跡」が位置するが、この遺跡の間で行き来はあったのか。前述したとおり「シレンナー遺跡」の石器石材は硬質のホルンフェルスを主体とし、硬質の泥岩（頁岩）とサヌカイトを伴うものである。ホルンフェルスは遺跡周辺に産出せず、対馬下島の巖原町内山周辺と巖原町・美津島町の一部で産出する。重い石器石材を陸路で運搬するのは現実的でなく、大量に運搬するには海路であろう。「シレンナー遺跡」までの北西部の遺跡は通過途中にあることから接触はあったと考えるのが自然である。しかし、北部の遺跡で朝鮮半島系の土器は見つかっておらず、積極的接触（交流）はなかったと考えられる。今のところ、北部で朝鮮半島系の土器が出てくるのは弥生時代以降に限られる。

下島の^{うづ}豆殿より佐須川中流の経塚を経て、美津島町^{けち}鶏知に至る線より東側は、内山花崗岩貫入の影響を受けた対州層群の頁岩で、紫味を帯びた極めて硬いホルンフェルスとなり露出している。島内の遺跡で出土する石器石材として使われているホルンフェルスは、ここから島内各地に運ばれ石器に加工されたのであろう。これまでの踏査で発見した新遺跡の殆どでホルンフェルス製石器が見つかる。佐須川中流で見られる熱変成の影響が少なかった硬質の頁岩も板状に割れやすく、打製石斧などに加工しやすい特徴を持つ。北部踏査において頁岩層に火成岩が貫入しているところを見つけており、北部の遺跡で見つかる石器石材が北部産のホルンフェルス及び硬質の頁岩製の可能性がある。

（3）新規発見の遺跡番号6「若宮神社遺跡（仮称）」

①若宮神社遺跡（仮称）

「若宮神社遺跡」は「シレンナー遺跡」の東に位置する。「シレンナー遺跡」からここまでの複数箇所黒曜石剥片・碎片、スクレイパーや石斧、須恵器・陶質土器を確認している。遺跡東側の海岸段丘上においても石斧やスクレイパー、黒曜石剥片・碎片を確認しており、遺跡の存在を確信していた。当初、海岸から踏査を行っており、満潮時や荒天時は遺跡に行き難く難儀していたところ、古道の存在を知り40分弱で到達することが出来るようになった。しかし、頻繁に使われていたのは昭和40年代初め頃までで、現在は荒れて不明瞭な箇所も見られるので注意が必要である。

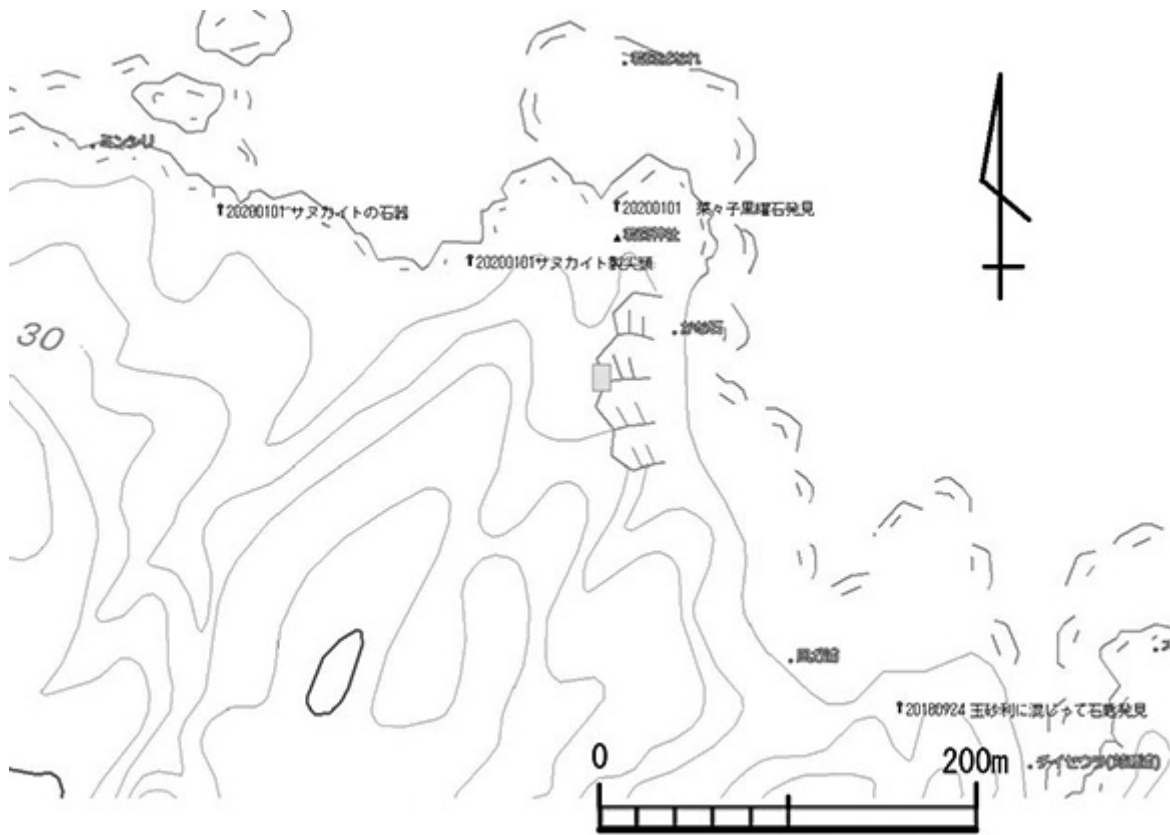


図5 若宮神社周辺の地図（国土地理院地図に加筆） S = 1/4,000

令和2年1月1日（2020）若宮神社周辺踏査を長崎菜々子と行った。「シレンナー遺跡」を通過し海岸沿いに東へ進んだ若宮神社西の海岸でサヌカイト製のスクレイパーを採集した。さらに進んだところでサヌカイト製石銃（石銃）を発見した（写真25）。旧石器時代の石銃かと期待したが、縄文時代の石銃と判った（註4）。「若宮神社遺跡」は北向きに突き出た小岬に所在し、東は10mほどの断崖、西は急勾配の赤土の斜面で縄文土器（写真26）と黒曜石石核、剥片（写真27）が確認できる。岬先端部の黒曜石石核と剥片は他では見られない大きさであることから、デポ（一時保管）ではないかと考えている。神社周辺では祭祀に使われた中世・近世のものと思われる壺がある。遺跡周辺の段丘上でも黒曜石剥片や石斧（写真28）などを採集している。

（2）若宮神社遺跡遺物



写真25 石銃



写真26 縄文土器



写真27 黒曜石



写真28 打製石斧

周辺で表面採集した黒曜石剥片に比べて大きく石核も見られる。また、遺物包含層下の斜面においてサヌカイト石核を採集している。岬先端部はイノシシの堀起しがあり、包含層崩落による遺物の流

失が懸念される。調査を行い遺跡登録されることを願っている。

「若宮神社遺跡」は北向きで対馬特有の北西・北東の風が吹き付ける立地である。背後の山林に入ると風を避けることができ、段々畑が作られていた。石斧を採集した南側の海岸段丘は、背後の森林に段々畑は作られておらず、落ち葉と腐葉土、枯木の下を探れば遺物が見つかりそうである。断崖上にあり波浪の影響は受けないが、塩害と風害、シカやイノシシの獣害により森林に立ち枯れが目立つ。

(4) 新規発見の遺跡番号10「ハゲ島遺跡（仮称）」

「ハゲ島遺跡」は舟志湾奥の上対馬町大增に所在する「朝日山古墳」の南250^mにある。この遺跡下の東側海岸で陶質土器・須恵器・石製紡錘車・鍛造鉄斧が見つかることから、「朝日山古墳」と同時代の5世紀後半のものと思われる。岬先端付近は墳墓があった山から採った土で埋め立てられ畑が作られている。埋立により陸続きとなったハゲ島の周囲は急峻で頂上付近は平坦部がなく、遺構や遺物は確認できなかった。東側の海岸で滑石が混入された土器片（写真29, 30）と黒曜石剥片を表採した。土器は沈線文が認められるが型式は不明である。海岸の遺物は令和2年の台風による高波で消滅してしまったが、山林内を確認したところ遺構と遺物は残っている。

「ハゲ島遺跡」がある舟志湾はリアス式海岸で山が海岸に迫り平坦地が少なく、小さな湾奥にある小河川の河口に石垣を築き、周辺の山の土で埋め立てて耕作地が作られている。舟志湾周辺の海岸は急峻な崖で通過できない箇所が多く、尾根に沿って目的地近くまで進み谷を下ることになる。舟志湾口の北に唐舟志、南に五根緒の集落があり、舟志湾側に海岸段丘が見られるがいずれも小規模である。舟志湾南側の2カ所に集落があったが、集団移住し現在は人の営みはない。踏査したが遺構や遺物は確認できなかった。



写真29 沈線文が認められる土器



写真30 同土器（内面）

(5) 新規発見の遺跡番号12 「五根緒赤崎遺跡 (仮称)」

①五根緒赤崎遺跡 (仮称)

北部踏査が一段落したことで縄文時代の遺跡が見つかっていない舟志湾^{しゅうし}周辺踏査を始めた。北部で遺物が見つかる地形を検索した結果、上対馬町五根緒の赤崎周辺が候補地の一つとなった。地元住民に相談したところ、上対馬町^{ごねお}五根緒赤崎周辺(図6)の所有者から踏査の許可をいただいた。岬基部～先端付近までは削平され畑となっている。東は北東風と波浪により侵食を受けた10mほどの断崖で、西は段々畑があり海岸まで降りることが出来る。岬先端付近は竹が生い茂り容易に近づけず、開けた場所も枯れた竹や倒木で地面は見えない。畑の端(東側の断崖近く)を調べると、文様入りの土器片、土器底部、黒曜石剥片、サヌカイト製スクレイパー、磨製石斧、礫器、石錘を確認・採集した。潮位が高いと海岸は通過不能となるが、地元住民への聞き取りの結果山道があることがわかった。しかし、シカやイノシシの獣害と手入れがなされてなく、道は不明瞭で地図を見ながらの踏査となる。時間が制限される海岸からより山道を使った踏査が望まれる。

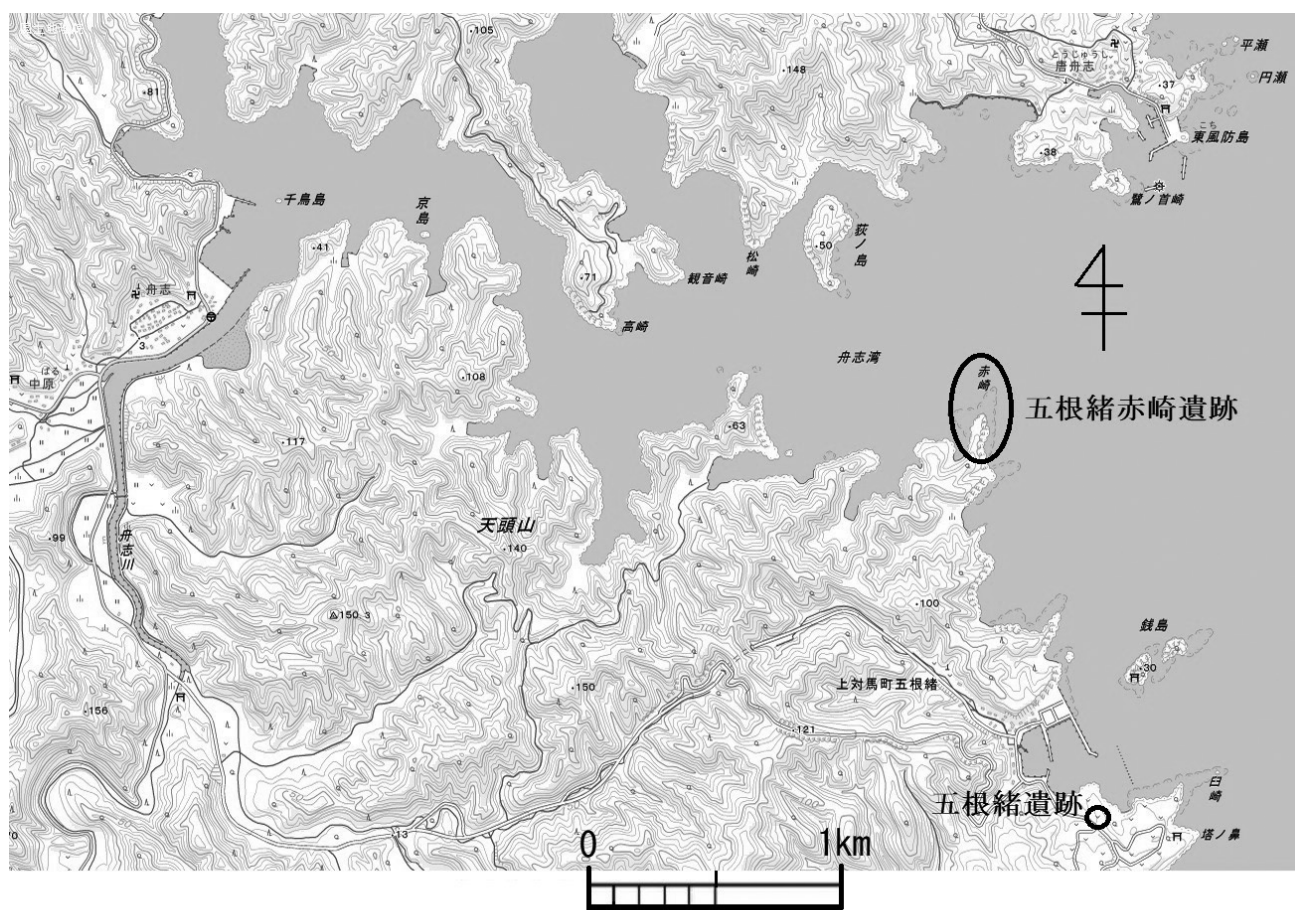


図6 五根緒赤崎周辺地図 (国土地理院地図に加筆) S - 1 / 30, 000

②五根緒赤崎遺跡の遺物と遺構

貝殻で付けた文様が入った土器口縁部(写真31)、土器底部(同32)、サヌカイト製スクレイパー(同33)、砂岩製の磨製石斧(同34)、礫器(同35)、敲石(同36)黒曜石剥片(写真37)を採集した。土器(写真31)を見る限り口縁部から底部まで膨らみがないようである。外反しない口縁部を拡大すると文様は貝殻縁で付けられたものであることが判る(写真37)。口唇部は上下に波打ち、文様と口唇部の間に直線の条痕が確認できる。周辺の海岸で文様を付けたと思われる貝が見つければ、対馬で作